

中山晋平の新民謡(四)―柳原音頭

大月 和彦

大正から昭和にかけて流行歌、童謡、「須坂小唄」や「東京音頭」などの新民謡のヒット曲を量産した中山晋平は、戦中から戦後には古関裕而や古賀政男など若手作曲家の台頭に押しされ、また、体調をくずしたこともあって新しい作品が少なかった。当時のラジオ番組「英会話」のテーマ音楽に、晋平作曲の「証城寺の狸囃」の軽快なメロディーが全国に流れていた。

昭和二七年晋平は、生まれ故郷に近い信州の山村の村民歌と民謡を作った。

新潟県妙高高原町と境を接する山間の豪雪地、下水内郡柳原村(飯山市)が、公民館発足五周年記念に村歌と民謡を作ることとし、歌詞を公募した。同村に疎開していた白秋門下の詩人稲葉晃三(日本民謡協会会員)の作品が入选し、作曲を晋平に依頼した。作曲の謝礼は当時では異例の三万円で済ませたという。

同年十一月の文化祭に村の小学校で開かれた村歌と民謡(柳原音頭)の発表会に、晋平はビクターの歌手喜久丸を伴って出席した。その夜渋温泉に泊り、翌日帰京、まもなく病に倒れ、一二月三〇日死去する。六五歳だった。小さな山村の村民歌と民謡が、晋平最後の作品となった。

当時地元の高校で教師をしていた作曲家月岡弘一は、この発表会に参加して、その様子を記している。発表会の前夜、公民館に集まった村の青年たちに、晋平自らが振り付けた音頭の踊りを指導した。最初、青年たちは歌に合わせて踊るものの緊張して意気が上がらない。そこで晋平が自ら列の先頭に立ち、太鼓を打ち三味線を持って踊る。大声で歌ったり冗談を言ったりして皆を笑わせて、やがて音頭が歌える和やかな雰囲気になったという。月岡は、晋平の気どらないふるまいと人柄に、庶民スタイルに徹した「民衆音楽家」の姿を見た、と述懐している。

ハアー 雪がとけたよナーエ

雪がとけたよすかれてすいて ハ ナンダネット

土になりたやエースキになりたや チョイト作立だソレ

ヤットマカセーアチャコラセーヤレヤットマカアチャコラセー柳原音頭―

(21・8・12)